



森敦

わが人生の旅

上

の遊び

弘済出版社

わが人生の旅(上)
天の遊び

平成二年一月一〇日 第一刷発行
平成二年三月一〇日 第二刷発行

著者 森敦

発行者 松田右近

発行所 弘済出版社

東京都豊島区北大塚一―一六―六

☎〇三(九一八)六三三―

〈振替〉東京二―八三三―三―

印刷所 共同印刷

© Tomiko Mori 1990 Printed in Japan

もくじ

遠い声……………	7
父の子守唄……………	14
放浪の血……………	20
母の心意気……………	26
サンキュー・グッドバイ……………	32
京城の空……………	38
馬上の貴紳……………	44
天の遊び……………	50

幽けき想い……………	56
微かなる咆哮……………	62
二人のヘールさん……………	68
兄貴は偉かった！……………	74
母の恋慕……………	80
親切な車掌……………	86
博愛丸……………	92
アイ・アム・ハングリー……………	98
途絶えた手紙……………	104
ある晴れた日に……………	110
千々石灘を渡る……………	116
白砂糖餡ばな……………	122
五人の萬治やん……………	128
唐行さんの家……………	134
桜島の大噴火……………	140
芋ば食って行かせ……………	146

だんだん重くなつとよ	152
内の海で	158
肝ば焼かすな	164
堪え性	170
雀百まで	176
カコクケキ	182
菅原ブツチョウさん	188
心鴻鵠にあり	194
二つは一つより多い	200
出藍の誉れ	206
直キコト其ノ中ニ在リ	212
恐れざる心	218
免許皆伝	224
敵は幾万ありとても	230
人を呑むの概あり	236
頭のかたち	242

闖入者……………	248
弟の信念……………	254
頭は使えつてもんだ……………	260
弟の論理……………	266
信玄の髭……………	272
鞭声肅肅……………	278
チューリップの縫いとり……………	284
お前は五銭じゃない……………	290

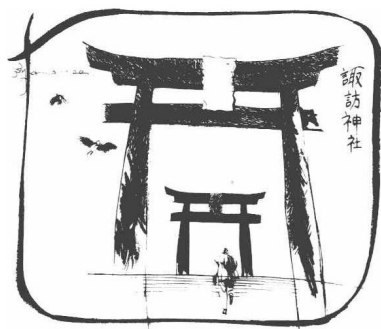
——わが人生の旅(上)

天の遊び

装幀／エジマ企画・井之上聖子

遠い声

ぼくは明治四十五年一月一日午前八時、長崎市銀屋町で生まれたと両親から聞かされていた。心臓外科の大家榊原^{さかしはらしげる}さん^{さん}にその生前会ったとき、榊原さんはあたかも自分ひとりが明治生まれでもあるかのように、明治明治といって盛んに自慢する。ぼくだって明治生まれだ、とぼくが言くと、榊原さんは、明治は何年だ、と訊^きく。四十五年だ、と答える^かと呵^か呵^か大笑して、四十五年は後半は大正だろう、明治は明治でも明治四十五年は偽明治だ、と言った。ぼくが小説『月山^{がつさん}』を書いて、いささか世に知られるようになったとき、「西



日本新聞」の若い記者が長崎市の地図を持って来て、銀屋町などという町はない、と言う。なんのことはない。「西日本新聞」の若い記者は、銀屋町などという町がないことを証明するために、親切にも長崎市の地図を持って来てくれたのである。念のためにと、戸籍をとってみると両親から聞かされていたのとは違って、ぼくは明治四十五年一月二十二日、熊本県天草富岡町に生まれると書いてある。むろん、生まれた時刻は記されてはいない。そんなとしまで、自分の戸籍も見ないで過ごすことがあろうかと、疑うひともあるかもしれないが、勤めるにも履歴書など書いたことがなく、生涯の大半を村々町々と放浪していたようなものだから、その必要もなかった。それにはまた別な訳もある。ぼくの両親は晩婚で父はともかく、母は陽気な明るいひとで、としよりもとしを若くみせたがって、ぼくにもとしを教えなかった。中学校にはいるとき口頭試問で、必ず両親のとしを訊かれると思ったので聞いてみたが、「親のとしなど知らないほうが親孝行よ」と言ってくれなかった。果たして口頭試問で両親のとしを訊かれた。そこで、「としは知りません」と答えたが、「どうして？」と更に訊かれたので、「聞くことは聞いたのですが、親のとしなど知らないほうが親孝行よと言われたんです」と言った。居並ぶ先生方はその間の事情を知ってか知らずか、互いに顔を見合わせてどッと笑った。話がつい横道にそれてしまったが、

ある日、突然女のひとから電話が掛かってきて、「あなたのお母さまは長崎市の銀屋町、造花屋さんをしていられたのではありませんか」と言った。「そうです。造花屋をしたたと聞いたことがあります。それにしても、銀屋町という町は、長崎市にはないそうじゃありませんか」と問い返すと、「いいえ、もとはあつたんです。いまはなくなりましたけど、銀屋町教会というのがあります。そのあたりを銀屋町といったんです。そうですか、やっぱり、あのお子さんがあなたでしたか。なつかしいわ。そのうち、お目にかかってお話したいわね」「こちらのほうこそ、お目にかかせていただきたいものですね。長崎市のことは母からいろいろ聞かされましたが、わたし自身記憶といつては、ほとんどないんです」「そうでしょうとも。まだお小さかったから」「再会を約して電話を切ったが、それっきり掛かって来ない。こちらから掛けようにも、いまにも訪ねてくれそうな話だったので、電話番号はおろか名前も聞いていなかった。なにか若々しい声でそのときは、なんの気もなく聞いていたが、ほとんど記憶にない銀屋町のころのぼくを知っているというからには、相当のとしでなければならぬ。だいいち、ぼくにしてからがことし六十九歳である。母もずっと前に高齢で死んでいる。ひよっとすると、電話の主は母とおなじほどのとしの女かもしれないが、そんなとしのひとがどうしてあんな、若々しい声が出せたのだ

ろう。いやいや、そんなとし、まで生きていられるひとがいるはずがない。ぼくはいつかあ
れは自分の心の底に忘れ去っていた、母の聲が甦って来たのではなかるうかと思うようにな
った。母は日本赤十字社の看護婦になって日露戦争に従軍し、それでためたいくらかの
金で実践女学校を卒業したばかりか、共立女子職業学校に通って造花を習った。たまたま
結婚した父が、政治に手を出して財を失ったので、いわば天草の富岡から長崎市に落ちて、
造花屋を開いて家計を助けたのである。ピエール・ロティがお菊さんと、そこに立って
街や入江を眺めたという諏訪神社のおくんちは大祭で、町々から傘鉾^{かさぼこ}が出てひとりで捧げ
て、大きな長い石段を境内まで登る。社への階段には、白ドッポ組と呼ばれる若者たちが
ひしめいていて、ようやく石段を登って来て降りて行った傘鉾に、「持って来い」（あるい
は、「戻って来い」というのかもしれない）と声を掛ける。声を掛けられれば、また大きな
長い石段を境内まで、傘鉾をひとりで捧げて登らなければならない。しかし、その声を掛
けられれば掛けられるほど名誉なのだそうで、母の造った桜の傘鉾はいちばん多く声を掛
けられたと、後々まで嬉しそうに自慢していた。『月山』以来招かれて何度も長崎市を訪
れる機会を得たが、何度行っても漠然とした印象しか残らない。それはなにも長崎市がそ
うだというのではなく、招かれた旅というものは、あらかじめスケジュールがきめられて

いて、それに乗せられて動くだけだから、ただそこに行つたというに過ぎないのである。旅は欲するとき欲するところへ、身銭を切つて行くべきものだ。すなわち、ぼくは放浪に終始したこの長い人生でほんとうの旅をして来たので、もはやその旅は終わったのかもしれない。しかし、その町の名を残した薄汚れた木造の教会を見たとき、諏訪神社の大きな長い石段を仰いだとき、公園のようなグラバー邸の展示館で、それはもう母のつくつたものであるうはずはないが、造花の桜の傘鉾を見いだしたとき、心に甦つて来たなにかはいよいよ深まってくる。こうした自分の姿を自分で見るべくもないが、詩人風木雲太郎がこう歌ってくれた。

銀屋町教会通り

——森 敦さんに

眩やくような冬の雨の中を

半世紀と十年余り昔の記憶の糸をたぐりながら

その人はいくたびもたちどまりふりかえり徘徊したが

幼年の手形も足跡も全く消えてしまった

銀屋町教会通りは

見知らぬ蝙蝠傘こうもりがさが往きかうばかりであつた

暮れ残る石づくりの眼鏡橋を眺めながら

途方に昏れて煙草を吸っているその人の

耳の奥の方から

阿茶あちやさんピー

太鼓持つてドン

と囃し言葉がながれだし

中島川の瀬の渦巻からくると紅葉が浮かびあがり

流浪の岸に幼年の祭がせりだしてきた

そうだ あのお宮日くんちの傘鉾くしの飾りは

母の手作りの造花だったはずだ

遠い時間の円周から故郷の核心へ近づきながら

雨にけむるうす闇に顔をかくした蝙蝠傘が通るだけで

たまゆらの帰郷の心を慰める一片の風景も現れてこない

冷たい枯れ柳の雫を別けて

夜が動きだすように動きだしたその人が

持ちかえた蝙蝠傘の右手は

望郷の刺青のようにインクにまみれていた

それとも まっ赤なリンゴの皮を時間の刃でむきながら

白い果実に切迫する

この作家の宿命に浮きでた静脈なのだろうか

その人の朧おぼろろな幼年の影が遂に扉をあけて出てこなかった

銀屋町教会通りは実存しながら

いつまでも幽明の境に立っていた

父の子守唄

風木雲太郎さんは本名貞島米親。『幻の耶馬台国^{やまたいこく}』の著者、『島原子守唄』の作詩者として知られる宮崎康平と共に働き、このペンネームは火野葦平がこの名を以て大成せよとつけてくれたという。なんでも高校を教えるかたわら、詩作をつづけているそうで、その詩は澄明で深く、格別大柄なひとではないが、ステッキでも持たせて歩かせたいような、悠悠とした風格がある。ぼくは長崎市を訪れるたびに、この風木さんの厄介になる。風木さんは長崎市の名所ともいべき寺々、石を敷きつめた細い道々、かつて異人たちが住んで

